

1/9 Thu.

第628回 名曲シリーズ  
サントリーホール 19時開演  
POPULAR SERIES No.628 / Suntory Hall 19:00

指揮  
Conductor  
ヴァイオリン  
Violin  
コンサートマスター  
Guest Concertmaster

**エリアス・グランディ** -p.5

ELIAS GRANDY

**前橋汀子** -p.7

TEIKO MAEHASHI

林 悠介 (ゲスト)

YUSUKE HAYASHI

**J. シュトラウス二世**

J. STRAUSS II

**喜歌劇〈こうもり〉序曲** [約9分] -p.8

“Die Fledermaus” Overture

**サン=サーンス**

SAINT-SAËNS

**序奏とロンド・カプリチオーソ** 作品28 [約10分] -p.9

Introduction et Rondo capriccioso, op. 28

**マスネ**

MASSENET

**タイスの瞑想曲** [約5分] -p.9

Méditation from “Thaïs”

**サラサーテ**

SARASATE

**ツィゴイネルワイゼン** 作品20 [約10分] -p.10

Zigeunerweisen, op. 20

[休憩]

[Intermission]

**モーツァルト**

MOZART

**交響曲 第35番** 二長調 K. 385 (ハフナー) [約18分] -p.11

Symphony No. 35 in D major, K. 385 “Haffner”

I. Allegro con spirito

II. Andante

III. Menuetto

IV. Presto

**ラヴェル**

RAVEL

**ボレロ** [約13分] -p.12

Boléro

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）



独立行政法人日本芸術文化振興会

1/10 Fri.

第24回 読響アンサンブル・シリーズ  
よみうり大手町ホール 19時30分開演 (19時00分から解説)  
YOMIKYO ENSEMBLE SERIES, No.24 / Yomiuri Otemachi Hall 19:30 (Pre-concert talk from 19:00)

ヴァイオリン  
Violin  
ナビゲーター  
Navigator

※出演者と曲目のみ掲載しています。曲目解説は当日別紙を配布予定です。

《日下紗矢子リーダーによる室内合奏団》

**日下紗矢子** (読響特別客演コンサートマスター)

SAYAKO KUSAKA (YNSO Special Guest Concertmaster)

**鈴木美潮** (読売新聞東京本社 教育ネットワーク事務局専門委員)

MISHIO SUZUKI

**モーツァルト**

MOZART

**ディヴェルティメント第11番** 二長調 K. 251 [約26分]

Divertimento No. 11 in D major, K. 251

I. Allegro molto

II. Menuetto

III. Andantino – Adagio – Allegretto

IV. Menuetto : Tema con variazioni

V. Rondo : Allegro assai

VI. Marcia alla francese

[休憩]

[Intermission]

**シェーンベルク**

SCHÖNBERG

**浄夜** 作品4 (弦楽合奏版) [約30分]

Verklärte Nacht, Op. 4 (version for string orchestra)



文化庁委託事業「2019年度 戦略的芸術文化創造推進事業」



主催：文化庁、読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

1/15 Wed.

第594回 定期演奏会  
サントリーホール 19時開演  
SUBSCRIPTION CONCERT No.594 / Suntory Hall 19:00

指揮  
Conductor  
サクソフォン  
Saxophone  
特別客演コンサートマスター  
Special Guest Concertmaster

ショスタコーヴィチ  
SHOSTAKOVICH

ジョン・アダムズ  
JOHN ADAMS

[休憩]  
[Intermission]

フェルドマン  
FELDMAN

グバイドゥーリナ  
GUBAIDULINA

下野竜也 *-p.6*  
TATSUYA SHIMONO

上野耕平 *-p.7*  
KOHEI UENO

日下紗矢子  
SAYAKO KUSAKA

エレジー [約5分] *-p.13*  
Elegy

サクソフォン協奏曲 [約29分] *-p.14*  
Saxophone Concerto  
I. Animato  
II. Molto vivo

On Time and the Instrumental Factor  
(日本初演) [約8分] *-p.15*  
On Time and the Instrumental Factor (Japan premiere)

ペスト流行時の酒宴 (日本初演) [約25分] *-p.16*  
Feast during a Plague (Japan premiere)

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）

独立行政法人日本芸術文化振興会

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京 ARTS COUNCIL TOKYO

協力：アフラック

指揮

エリアス・グランディ

ELIAS GRANDY, Conductor

ドイツの新鋭が振る  
熱狂のボレロ



©Felix Broede

同世代の傑出した才能として世界から熱い視線を送られているドイツの新鋭が読響に初登場。〈ボレロ〉などの名曲を思い切りのいいtaktで振り、新年を鮮やかに彩る。

2015年、ショルティ国際指揮者コンクールで第2位となり、一躍世界的な注目を集めた。12年から16年までダルムシュタット市立劇場のカペルマイスターを務め、15年から現在まではドイツの名門ハイデルベルク市立劇場の音楽総監督の任にある。

これまでに、ザルツブルク・モーツァルテウム管、フランクフルト歌劇場管、ブレーメン・フィル、ラインラント＝プファルツ州立フィル、カタール・フィルなどに客演しており、今年もミュンヘン響、ホーフ響などの共演が予定されている。オペラでは、昨年10月にミネソタ・オペラでR. シュトラウス〈エレクトラ〉を振って北米デビューを飾り、今年1月には二期会〈カルメン〉（札幌公演）、3月にはフランクフルト歌劇場でディーリアス〈村のロミオとジュリエット〉を振る予定であるなど、活躍の場を広げている。モンテヴェルディ、モーツァルトをはじめとするバロック、古典派の作品から、ヤナーチェク〈カーチャ・カバノヴァー〉、ハース〈朝と夜〉、ルジツカ〈ベンヤミン〉の近現代作品まで幅広いレパートリーを振っている。

1/9  
名曲

Maestro

指揮

## 下野竜也

TATSUYA SHIMONO, Conductor

名コンビが久々の再会  
攻めのプログラムを披露

©読響

数々の名演を築き上げてきた前首席客演指揮者が、2年10か月ぶりに読響の指揮台に帰ってくる。2曲の日本初演を含む意欲的なプログラムで、その音楽性を遺憾なく発揮するだろう。

1969年鹿児島生まれ。鹿児島大学教育学部音楽科、桐朋学園大学音楽学部附属指揮教室、イタリア・シエナのキジアーナ音楽院で学んだ後、大阪フィルの指揮研究員となり、朝比奈隆ら巨匠たちの薫陶を受けた。文化庁派遣芸術家在外研究員としてウィーン国立演劇音楽大学に留学中、2000年の東京国際音楽コンクールと01年のブザンソン国際指揮者コンクールで優勝を飾った。

国内の主要オーケストラはもとより、チェコ・フィル、シュトゥットガルト放送響、ローマ・サンタ・チェチーリア国立アカデミー管などと共演し、国際的に活躍している。また、出光音楽賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞、新日鉄音楽賞・フレッシュアーティスト賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、芸術選奨文部科学大臣賞、東燃ゼネラル音楽賞洋楽部門奨励賞など受賞も数多い。06年から読響の正指揮者、13年から17年3月までは首席客演指揮者として多大な功績を残した。14年9月にはカレル・フサの〈この地球を神と崇める〉を日本初演し、読響をミュージック・ペンクラブ音楽賞受賞に導いた。17年4月から広島響の音楽総監督を務めるほか、広島ウインドオーケストラ音楽監督、京都市響常任首席客演指揮者（2020年3月まで）、京都市立芸術大学音楽学部指揮専攻教授、東京音楽大学吹奏楽アカデミー特任教授などの任にある。



©藤山紀信

ヴァイオリン

## 前橋汀子

TEIKO MAEHASHI, Violin

読響・首席客演指揮者の山田和樹に「一音を聴いただけで、ただ者ではないと思った!」と絶賛された気鋭のサクソフォン奏者。茨城県東海村出身。東京芸術大学卒業。日本管打楽器コンクールに史上最年少で第1位及び特別大賞、アドルフ・サククス国際コンクール第2位を受賞。スコットランドでの世界サクソフォン・コンGRESにソリストとして出場し、喝采を浴びた。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォンの可能性を最大限に伝えている。テレビ「題名のない音楽会」「情熱大陸」などにも出演。「The Rev Saxophone Quartet」メンバー、吹奏楽でも活躍中。2018年第28回出光音楽賞受賞。鉄道と車もこよなく愛し、深く追求し続けている。昭和音楽大学非常勤講師。



©Shumpei.O

サクソフォン

## 上野耕平

KOEI UENO, Saxophone

2017年に演奏活動55周年を迎え、日本を代表する国際的ヴァイオリニストとして、その優雅さと円熟味あふれる演奏で、多くの聴衆を魅了し続けている。これまでにベルリン・フィルをはじめとする世界一流のアーティストと共演を重ねてきた。近年、小品を中心とした親しみやすいプログラムによるリサイタルを全国各地で展開。一方、バッハ〈無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ&パルティータ〉全曲演奏会や、14年に結成した前橋汀子カルテットの演奏会にも取り組む。最新CDは自身2度目の録音となる『バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ&パルティータ全集』（19年8月）。04年日本芸術院賞受賞。11年春に紫綬褒章、17年春に旭日小綬章を受章。使用楽器は1736年製作のデル・ジェス・グアルネリウス。

## J. シュトラウス二世 喜歌劇〈こうもり〉序曲

19世紀の前半から中盤にかけて大流行し、ヨーロッパ諸国からロシア、さらには北アメリカに至る広い地域で人気を博したウィンナ・ワルツ&ポルカ。ヨハン・シュトラウス二世(1825~99)は流行の立役者だった父・ヨハン(1世)の人気を受け継ぎ、自身のオーケストラを率いて多くのコンサートや舞踏会に出演。ウィーン音楽界のシンボルになった。交響曲や器楽ソナタなどシリアスなタイプの音楽を世に問うことはなかったものの、彼の作品と活躍は後世の私たちにニューイヤー・コンサートなどを通じて幸福をもたらし、クラシック音楽史に華麗な花を咲かせたのである。

1844年にコンサート・デビューを飾ってから30年を迎えた1874年。アン・デア・ウィーン劇場で初演された喜歌劇〈こうもり〉は、1870年以降に劇場音楽の分野へと打って出たヨハン二世にとって最初の大きな成功作となり、現在もお各地のオペラハウスで上演され続けている。多くの人たちが協力して主役(銀行家のアイゼンシュタイン)をだますという愉快な物語はもちろん、ウィットに富んだ台詞や美しい歌のメロディ、ワルツやポルカのリズムが相まって、これぞウィーンの粋とでもいうべき世界を作り上げている名作だといえるだろう。

序曲はコンサートでも人気を得ているが、劇中で歌われるいくつかのメロディを軸として構成されている。勢いのある序奏に続き、劇の終わり近くでアイゼンシュタインが歌うメロディ、楽しい夜会の終わりを告げる朝の鐘、舞踏会でのワルツ、アイゼンシュタイン夫人の口ザリンデが「8日間も夫と離ればなれになり悲しい……(と見せかけて、実はワクワク)」と歌うメロディなどが次々に演奏される。

〈オヤマダアツシ 音楽ライター〉

作曲：1874年／初演：1874年4月5日、ウィーン／演奏時間：約9分  
楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器(大太鼓、小太鼓、トライアングル、シンバル、鐘)、弦五部

## サン＝サーンス 序奏とロンド・カプリチオーソ 作品28

### マスネ タイスの瞑想曲

### サラサーテ ツイゴイネルワイゼン 作品20

19世紀は、ニコロ・パガニーニやヘンリク・ヴィエニャフスキをはじめ数多くのヴィルトゥオーゾ・ヴァイオリニストを輩出した時代であり、彼らの高度な演奏テクニックを目の当たりにして多くの作曲家たちが盛んに協奏曲などを書いた時代でもあった。ヴァイオリニストたちも自分のために多くの曲を書いた。

**カミーユ・サン＝サーンス**(1835~1921)が1863年に書いた**〈序奏とロンド・カプリチオーソ〉**は、同じ日に初演されたヴァイオリン協奏曲第1番(単一楽章)のフィナーレ楽章として構想されたが、結果的には独立した作品となり、パブロ・デ・サラサーテ(1844~1908)の独奏と作曲家自身の指揮で初演されている。曲は哀愁を帯びたメロディによる序奏(アンダンテ・マリンコニコ)と、舞曲調のリズムをもつ主部(アレグロ・ノン・トロppo)により構成。主部の冒頭に演奏される切れ味のよい旋律が何度か演奏される中、他に三つの旋律が加わる。

フランス中部のロワール地方で生まれた**ジュール・マスネ**(1842~1912)は、主にオペラやバレエなど、劇場の音楽で当時から名声を得ており、風光明媚な各地の光景を音楽で描いたような管弦楽組曲は現在も演奏される。高級娼婦のタイスを主役としたオペラ**〈タイス〉**は、修道僧のアタナエルが彼女を改心させてキリスト教の信者にしようと努めるものの、共に苦行の道へと迷い込む中でタイスへの愛を確認。最終的には彼女の死によって深い絶望を味わうという物語である。ヴァイオリンの独奏曲として人気が高い**〈タイスの瞑想曲〉**は、オペラの第2幕第1場から第2場へと移行する橋渡しの音楽として演奏されるもの。タイスがアタナエルによってキリスト教の精神に目ざめようとする場面であり、音楽がその清らか

な心情をストレートに表現しているようだ。オペラでは主にコンサートマスターが演奏する独奏ヴァイオリンとオーケストラによって演奏されるが(終盤にほんの少しだけ歌詞のない合唱が加わる)、コンサートではこれをほぼ同じ形で独立させたものが演奏される。

フランスとの国境に近いスペイン北東部(ナバーラ州)のパンプローナという街で生まれたヴァイオリンのヴィルトゥオーゾ、**パブロ・デ・サラサーテ**(1844~1908)の存在は、ブラームスやチャイコフスキーをはじめとする多くの作曲家たちを驚かせた。彼の演奏を聴いて新作への意欲を刺激されたほか、結果として彼に献呈された作品も少なくない。一方でサラサーテ自身も、自らの高度な演奏テクニックを駆使した曲を作り、ヴァイオリニストとしての自分をアピールすべく努めた。作品番号が付けられた曲だけでも50作以上を数えるオリジナル作品は、すべてがヴァイオリンとオーケストラ(またはピアノ)のために書かれており、曲を通じて彼自身の演奏テクニックや得意技などを推察することができる。ロマ(ジプシー)の音楽をヒントに作られた**〈ツィゴイネルワイゼン〉**(ドイツ語で「ロマのメロディ」という意味)は、四つの部分によって構成されており、名人芸を披露するような奏法も含む。第1部は劇的な幕開けの音楽であり、続く第2部では深い情感をたたえた旋律が切々と演奏される。続けて演奏される第3部は、独奏ヴァイオリンが弱音を付けて繊細な音色を駆使しながら、ハンガリー民謡の旋律を奏でる短い部分。第4部は急速なテンポに変化し、アクロバティックな演奏を繰り広げる。

〈オヤマダアツシ 音楽ライター〉

【序奏とロンド・カプリチオーソ】作曲：1863年/初演：1867年4月4日、パリ/演奏時間：約10分  
楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン 【**タイスの瞑想曲**】作曲：1892年/初演：1894年3月16日(オペラ全曲)、パリ/演奏時間：約5分 楽器編成/フルート2、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、ティンパニ、ハープ、弦五部、独奏ヴァイオリン 【**ツィゴイネルワイゼン**】作曲：1878年/初演：1878年、ライプツィヒ/演奏時間：約10分 楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、トライアングル、弦五部、独奏ヴァイオリン

## モーツァルト

### 交響曲 第35番 二長調 K.385 〈ハフナー〉

現在、ニックネームで親しまれている多くのヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~91)の作品同様、〈ハフナー〉というこの交響曲のニックネームも作曲家自身の命名ではなく、後年になって誰かが呼んだものである。ハフナーとはザルツブルク在住の有力者であるハフナー家のことであり、この作品はまずこの家のジークムント・ハフナーII世が子爵となった記念の授与式で演奏されるべく、全6楽章のセレナーデとして1782年の8月頃に書き上げられた(1776年作曲の、現在では〈ハフナー・セレナーデ〉として人気を得ている曲[K.250/248b]とは別の作品である)。

作曲を依頼したのはモーツァルトの父であるレオポルトだと伝えられ、おそらくはモーツァルト家からの祝意を示す贈答の音楽といった役割も果たしたことだろう。作曲当時のモーツァルトは、故郷であるザルツブルクの司教と決別する形でウィーンへと移住し(1781年夏)、しかも父の反対をよそにコンスタンツェ・ウェーバー嬢と結婚してしまった時期と重なる。そうした状況から察すると、父親への贖罪しよくざいの気持ちも込められていたのではないだろうか。

交響曲としての〈ハフナー〉は、1783年3月に行う予定の予約演奏会のため、新作を発表する必要性から生まれた。しかしモーツァルトは、上記の〈セレナーデ〉から二つの楽章(行進曲、メヌエット)を削除し、管楽器を補強するなどして4楽章形式の交響曲に再構成。現在、私たちが聴くのはこのヴァージョンである。

**第1楽章** アレグロ・コン・スピリト、二長調、ソナタ形式。

**第2楽章** アンダンテ、ト長調、ソナタ形式。

**第3楽章** メヌエット、二長調、三部形式。

**第4楽章** プレスト、二長調、ロンド・ソナタ形式。

〈オヤマダアツシ 音楽ライター〉

作曲：1782~83年/初演：1783年3月23日、ウィーン/演奏時間：約18分  
楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

ラヴェル  
ボレロ

「狂ってる、狂ってる、狂ってるわ」

1928年11月22日、パリのオペラ座（ガルニエ宮）で人気ダンサーのイダ・ルビンシテインと彼女のバレエ団がモーリス・ラヴェル（1875～1937）作曲の〈ボレロ〉を初演した際、客席にいた老婦人は熱狂する観客の中でこう叫んでいた。それを目撃したラヴェルの弟エドゥアールが兄モーリスに伝えたとき、その答えは「その婦人は理解できたんだね」だったという。

今では名曲コンサートで演奏される曲として、またオーケストラの多彩な楽器を紹介する「音のカatalog」のような作品として親しまれている〈ボレロ〉だが、たった二つの主旋律とひとつのリズム・パターンだけで曲を作り上げてしまうという珍妙なアイデアは、実験的な作品が多数生まれた当時としても大胆過ぎるものだっただろう。しかもその音楽が単調にならず、「とあるスペインの居酒屋で皆が盛り上がっている中、ひとりの踊り子がテーブルに上がってステップを踏み出すと、そのダンスは徐々に活気を帯びていく」というバレエのストーリーと並行するかのよう観客（聴衆）の心を興奮させるのだから、ラヴェルの“策士っぷり”には脱帽だ。

当初、ルビンシテインからの依頼は、スペインの作曲家であるイサーク・アルベニスのピアノ曲をオーケストラ編曲するというプランだった。しかし、編曲権の関係で断念せざるを得なくなり、結果としてオリジナル作品を書くことになったのである。作曲時には「ファンダンゴ」（スペインの熱狂的な民俗舞踊）という曲名も決定しかけていたが〈ボレロ〉に落ち着き、前記のようにバレエとして初演された。話題を呼んだこの音楽は1929年11月に、アルトゥーロ・トスカニーニ指揮によるニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団の演奏でコンサート初演が行われている。

〈オヤマダアツシ 音楽ライター〉

作曲：1928年／初演：1928年11月22日、パリ／演奏時間：約13分  
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ2（オーボエ・ダモーレ持替）、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ソプラノサクソフォン、テナーサクソフォン、ホルン4、ピッコロトランペット、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、小太鼓、銅鑼）、ハープ、チェレスタ、弦五部

ショスタコーヴィチ  
エレジー

ドミトリー・ショスタコーヴィチ（1906～75）は、1926年にレニングラード音楽院作曲科の卒業作品として書いた交響曲第1番（1925）で若き天才として楽壇に登場し、歌劇〈ムツェンスク郡のマクベス夫人〉（1930～32）が1934年に初演されると、その名声は頂点に達した。2年後にはソ連共産党の機関紙『プラウダ』で批判されて失脚するが、1937年に交響曲第5番で復権。その後もスターリンの独裁体制下のソ連で政治に翻弄されながら、批判と称賛が繰り返される浮き沈みの激しい人生を送った。ショスタコーヴィチは、生涯にわたって、それぞれ15曲の交響曲と弦楽四重奏曲を書いている。交響曲は、その規模ゆえに社会的影響が大きく、政治的な背景や圧力に翻弄されたが、弦楽四重奏曲はもっと自由で、創作上の工夫や作曲家の心情がストレートに表現されるジャンルとなった。

〈エレジー〉（アダージョ）は、もとは弦楽四重奏のための作品である。ショスタコーヴィチがこのジャンルに本格的に取り組むのは、弦楽四重奏曲第1番（1938）からだが、〈エレジー〉はそれ以前に、〈ポルカ〉とともに弦楽四重奏のための二つの小品として作られた。1931年、休暇先のバトゥーミで〈マクベス夫人〉第1幕のピアノ譜を完成させたショスタコーヴィチは、次の仕事に取りかかるまでのちょっとした気晴らしだったのか、〈マクベス夫人〉とバレエ音楽〈黄金時代〉（1929～30）の二つの舞台作品の旋律をもとにした作品を一晩で書いた。〈エレジー〉は、第1幕第3場で若妻カテリーナが愛のない生活の孤独を歌う、重苦しい表情のアリアに基づき、〈ポルカ〉とともに、同じホテルに宿泊していたヴィヨーム弦楽四重奏団に献呈された。初演等に関する詳細は明らかではなく、楽譜も行方不明になっていたが、1984年にポロディン弦楽四重奏団によって発見され、同年9月20日に蘇演された。本日は、シコルスキ編纂の弦楽合奏版による。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1931年／初演：不明／演奏時間：約5分  
楽器編成／弦五部

## ジョン・アダムズ サクソフォン協奏曲

現代アメリカを代表する作曲家ジョン・アダムズ(1947～)は、アカデミックな伝統と実験音楽的な語法の結合から出発し、その後、ミニマル音楽とロマン主義的な要素を混ぜ合わせたポスト・ミニマルの旗手として注目を集めた。さらに〈中国のニクソン〉(1987)や〈クリングホファーの死〉(1991)等、政治や社会問題を題材にオペラを次々と発表し、独創性を発揮した。近年は、ベルリン・フィル2016/17シーズンのコンポーザー・イン・レジデンスを務めるなど、ヨーロッパをはじめ世界的に作品が演奏される機会が増えている。近年の読響定期でも、2015年に首席客演指揮者(当時)の下野竜也が、代表作〈ハルモニレーレ〉(1984～85)を、1986年に行われた日本初演以来29年ぶりに取り上げ、2018年にはサクソフォンが大活躍する〈シティ・ノワール〉(2009)をデニス・ラッセル・デイヴィスが指揮した。

アダムズは、東海岸のニューイングランド地方に生まれ育った。祖父はビッグバンドが連日登場するダンスホールを経営し、両親もアマチュアのジャズ・ミュージシャン。「非常に強くジャズの影響を受けた」(アダムズ)と語るように、ジャズは幼い頃から彼の身近にあった。〈サクソフォン協奏曲〉(2013)の作曲では、かつてレコードで聴いたジャズの巨匠たちを思い出し、チャーリー・パーカー、スタン・ゲッツ、エリック・ドルフィらの演奏が下地になっている。

全体は、二つの楽章から成る。**第1楽章**は、オーケストラの上行音型の反復を背景にサクソフォンが明るい音色で現れる開始が印象的で、その後もサクソフォンは、オーケストラと対峙しながら自在に動き回る。続く緩徐楽章のような穏やかな部分ではサクソフォンがたっぷりと歌い、即興風の楽想も織り交ぜ、快活な終結部は静かに結ばれる。「モルト・ヴィーヴォ」の**第2楽章**は、サクソフォンが主題を示してオーケストラを挑発し、主題の反復と掛け合いを繰り返す。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：2013年／初演：2013年8月22日、シドニー／演奏時間：約29分  
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、ハーブ、ピアノ、チェレスタ、弦五部、独奏アルトサクソフォン

## フェルドマン

### On Time and the Instrumental Factor (日本初演)

モートン・フェルドマン(1926～87)は、アメリカ実験音楽の作曲家である。ニューヨークに生まれたフェルドマンは、12歳からピアノを習いはじめ、その後、ヴェルペラに作曲を師事した。1949年の冬、あるコンサートでジョン・ケージ(1912～92)と偶然出会い、言葉を交わしたことで、彼の創作の方向性は決定づけられた。二人はすぐに意気投合し、フェルドマンは、ほどなくしてアール・ブラウン、クリスチャン・ウォルフ、デヴィッド・チュードアらのケージ・サークルのメンバーになった。

音を因習や論理的な構造から解放し、作曲家がコントロールするのではなく、そこに立ち現われる個々の音に耳を傾けるとする考え方を実験主義という。それを実現するためにフェルドマンは、〈プロジェクション〉(1951)において、ケージらに先駆け、音楽史上初めて図形楽譜を用いた。1957年から再び五線譜の記譜に戻るが、フェルドマンは、音楽の素材を限定する方向に進む。音の数は減り、多くの休符を含み、ゆっくりと弱音で動き、反復も際立ってくる。そして絨毯の収集家でもあった彼は、1960年代以降は、中近東の絨毯の文様パターンや織り方の研究から、周期的な反復に基づいて和音を対位的に置き換え、累積する技法を生み出した。さらに70年代に入ると、マーク・ロスからニューヨーク派の画家たちとの交流から新たな作品を生み、人間の音の記憶とも関わる数時間に及ぶ大作を手がけるなど、実験的な精神は最後まで貫かれた。

〈On Time and the Instrumental Factor〉は、1969年の作品である。フェルドマンはこの曲について、「音色と音域は同じ問題で、どちらも音高よりも重要である」と語る。厳選された数少ない音で、独特の音色を作り磨き、立体的に配置される。8分ほどの短い作品であるが、時間感覚が揺らぎ、耳を惹きつけるステイックな音楽になっている。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1969年／初演：1971年4月24日、ダラス／演奏時間：約8分  
楽器編成／フルート2、ピッコロ、アルト・フルート、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、バストランペット、トロンボーン3、チューバ、打楽器(グロックンシュピール)、ハーブ、チェレスタ、弦五部

## グバイドゥーリナ

## ペスト流行時の酒宴 (日本初演)

ロシアの作曲家ソフィア・グバイドゥーリナ (1931~) は、タタール共和国のチーストポリで生まれた。モンゴル系タタール人の父親とロシア人 (ポーランドとユダヤにもルーツがある) の母親をもち、東洋文化の香り高い首都カザンで育ちながら、厳格なロシア風の教育を受けた。カザン音楽院でピアノと作曲を学び、1954年モスクワ音楽院に入学、ペイコとシェバリンに作曲を師事した。1963年に全ソ作曲コンクールで第1位を受賞したものの、以後は作品を発表する機会に恵まれず、映画音楽の仕事で糊口を凌いだ。その創作は、ショスタコーヴィチやバルトークの影響を受けた新古典主義風の作風から出発し、やがて12音技法やトータル・セリーによる作曲を試み、1969~70年にモスクワの電子音楽スタジオで実験を行うなど、独自の音楽を探し続けた。

また、1975年には、1940年代生まれの二人の作曲家、ススリン、アルティオーモフとともに即興演奏グループ「アストレーヤ」を結成した。ロシアやアジア等の民俗楽器の音色を探求し、集団即興では3人が互いの音を聴きながら楽器を演奏すると、それらの音が一体化して新たな人格が現れたという。この不思議な経験は、彼女の創作にも影響を与えた。この頃、グバイドゥーリナの名前は、国外でも少しずつ知られるようになってくる。1980年代後半から90年代にかけての急激な民主化やソビエト連邦崩壊を経て、ヴァイオリン協奏曲として書かれた〈オッフフェルトリウム〉(1980) が紹介されると、モスクワを拠点として活動していた同世代のエディソン・デニソフ (1929~96)、アルフレート・シュニトケ (1934~98) とともに、鉄のカーテンに覆われていた時代の彼女の活動と作品に注目が集まり、国際的な作曲家として認められた。1992年にロシア国籍を保持したまま、ベルリンに移住。その後の意欲的な創作活動には目を見張るものがある。

ロシア正教の洗礼を受けているが、生まれながらの複雑な背景、国家の圧力と崩壊といったグバイドゥーリナを取り巻く過酷な状況は、自身の内奥の声に耳を傾けることで克服されてきた。典礼のための宗教音楽ではなくても、彼女の音楽には深い祈りが込められ、厳しくも美しい響きをたたえている。

〈ペスト流行時の酒宴〉は、2005年に作曲され、翌年、サイモン・ラトル指揮の

フィラデルフィア管弦楽団によって初演、作品は指揮者に献呈された。タイトルは、ロシア近代文学の父プーシキンの同名の戯曲から付されている。黒死病と言われたペストは、古代から大流行を繰り返し、全世界で多くの犠牲者を出してきた。死の病への恐れ、抵抗、根絶されることなく再び広がる病と死の恐怖。そのメタファーが作品全体を覆っている。

音楽は、金管楽器のファンファーレで開始される。力強いが不穏なこのモチーフは反復され、その後も楽曲全体で様々な楽器で繰り返される。金管楽器の下行音型でゆっくりと大きな恐怖が近づき、低音でうごめき、ティンパニの連打が恐怖をさらに増大させる。冒頭の不穏なモチーフは低音楽器から立ち上がり、高音に到達する。静かに、しかし確実に蔓延する死の病。モチーフが何度も反復され、やがてテンポを上げていき、鐘の音が連続して鳴り響く。全体の4分の3まで進んだところで、異質な電子音が不意に現れ、オーケストラに重なる。クラブ・ミュージックのような低音リズムの反復で、2~3小節単位で現れては消える。この表層的な響きは、次第にオーケストラを浸食していき、モチーフ音型と重なり、16回目の登場でその存在は肥大化し、熱狂の頂点に達する。しかし、それはあっけなく断ち切られ、静けさを取り戻す。最後は、トランペットが冒頭のモチーフを力強く奏でた後、マリンバの乾いた音が連打される。作曲者はこの曲について記している。「そこに何かあるとしたらそれは希望」。私たちはその結末に希望を見出すことができるだろうか。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：2005年 / 初演：2006年2月15日、フィラデルフィア / 演奏時間：約25分  
楽器編成 / フルート4 (ピッコロ持替)、オーボエ4、クラリネット3 (エスクラリネット持替)、バスクラリネット、ファゴット4 (コントラファゴット持替)、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、マリンバ、ヴィブラフォン、銅鑼、鐘、ウインドチャイム、ベルプレート)、ハープ2、ピアノ、チェレスタ、電子音、弦五部